



CAJLE Newsletter

No. 40 June 2010

カナダ日本語教育振興会

Canadian Association for Japanese Language Education

P. O. Box 75133
20 Bloor St. East Toronto, Ontario M4W 1A0, Canada
Email: Cajle.Kaikei@gmail.com
Web: <http://cajle.info/home>

Editors: Keiko Aoki, Yoko Sugimoto, Shunko Muroya (Chief)

Copyright©CAJLE 2010

目次	
☐ CAJLE 会長のことば	2
☐ CAJLE2010 年次大会ご案内	3
☐ 特集記事	
CAJLE と CASLT の提携	4
ウエストウッド高校の日本語プログラム新設	5
弁論大会の州大会を初主催して - UQAM	7
☐ 部会・教師会情報	
CAJLE アトランティック部会報告	8
CAJLE オンタリオ部会報告	8
AJTA 報告	9
Nihongo BC 報告	10
☐ 学会・研修会情報	
汎米日本語教師合同研修会	10
継承語教師養成ワークショップ	11
☐ 学校紹介	
オンタリオ州 ブロック大学	13
オンタリオ州 オタワ日本語学校	13
サスカチュワン州 レジャイナ日本語学校	14
☐ リレー随筆	15
☐ CAJLE 掲示板	
CAJLE2010 年上半期活動報告	17
☐ 国際交流基金コーナー	
国際交流基金ウェブリソース紹介	18
スカイプ茶話会へのお誘い	19
☐ 教材紹介	
「ことば！ Fun with Words in Japanese」	20
☐ 巻末言	20
☐ 編集後記	23
☐ 会員規定 - Membership	24

会長のことば

会長 大江都

新緑が目にもぶしい季節となりました。世界の各地でご活躍の皆さま、いかがお過ごしでしょうか。空気の澄んだここカナダの東海岸では、初夏の太陽がことさら美しく感じられる日々です。

すでに本号、そして過去のニュースレターで、多数の皆さまが報告くださいましたが、CAJLE においてはこの1年、組織内での活動の充実に加え、対外的に、さまざまな発展が遂げられました。

ちょうど1年前、ニュースレター第38号で、国際交流基金トロントセンターの藤井副所長に「さくらネットワーク」のご紹介をいただきましたが、今年の1月、CAJLEは正式に「さくらネットワーク中核メンバー」に認定されました。その役目は、交流基金との協力の下に「カナダにおける日本語教育の普及・拡大・発展に寄与する波及効果の高い事業を行う」ことです。正にCAJLEが目標とすることに重なる内容です。中核メンバーに選ばれたのは、CAJLEのこれまでの功績が認められたということにも繋がりが、たいへん栄誉あることだと思います。また同時に、大きな責任を課されたということでもあります。これを機に、会員の皆さま共々、さらに精進し、活動の充実を図っていきたいと考えます。

「さくらネットワーク」参加と平行して、もうひとつ、画期的なことがありました。CAJLEが、The Canadian Association of Second Language Teachers (CASLT)の提携団体になることが、CAJLEおよびCASLT両団体により合意、承認されました。その詳細については、本号に掲載の西島副会長の記事(4ページ)をご一読いただければ幸いです。記事に説明されているとおり、CASLTは、カナダにおける第二言語教育を向上・促進させることを

目的に、さまざまな活動、支援を行っています。メンバーは、公用語の英仏語を始め、多種の言語分野の教育者、研究者です。その仲間に入れていただくことにより、CAJLEは日本語教育について伝達し、理解を求めていくことができるでしょう。またそれに加え、「多文化・多言語主義のカナダにおける日本語教育」という広い視点も培っていくことができると考えます。具体的なメンバーシップ、プロジェクト、その他については記事をご覧ください、会員の皆さまにも是非何らかの形で参加いただきたいと思います。

対外的連携につき、もう一点。2008年に開始された「日本語グローバルネットワーク」への参加も、引き続き行われています。来る7月、台北の台湾国立政治大学において、ICJLE2010国際大会が開催される予定です。昨年同様、各国・地域の代表によるシンポジウムが行われますが、今年度は、CAJLEの代表として、有森丈太郎氏に参加いただくことになりました。その結果については、また後日、報告いただけたと思います。

さて、以上のような背景の下、いよいよ8月のCAJLE2010年次大会が目前に迫ってまいりました。すでに皆さまにお知らせしましたとおり、今年度の大会は、バンクーバーのブリティッシュ・コロンビア大学(UBC)において、三日間にわたり行われる予定です。いうまでもなく、太平洋岸に位置するバンクーバーは、カナダにおける日本語教育の発祥の地です。現在も、全カナダの日本語学習者の半数以上は、バンクーバーを含めたブリティッシュ・コロンビア州に集中しているといわれます。この地域での高等、中等、初等教育機関、そして民間の機関での日本語教育には、目覚ましいものがあります。

UBC で開催される今大会は、それを象徴し、多彩で充実したプログラムが予定されています。日本語のみならず、日本研究の分野からも講師をお招きし、「言語・コンテンツ・文化の統合」に焦点を当てた、ダイナミックな討議が展開することでしょう。

バンクーバーはこの2月、冬季オリンピックの開催場所としても注目されました。この熱気あふれるバンクーバーで開かれる今大会に、多数の皆さまがご参加くださる

ことをお待ちしております。

最後に、私個人からのご挨拶を一言。昨年秋より今年の4月まで、しばし会長の役目を休ませていただきましたが、お蔭様にて元気を回復し、再び任務に復帰いたしました。どうか、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。皆さまにとって、健康で、すばらしい夏となりますことを祈って。

CAJLE2010 年次大会

CAJLE2010 年次大会ご案内

実行委員会

2010年度CAJLE年次大会は、8月13日(金)、14日(土)、15日(日)の三日間の日程で、バンクーバーのブリティッシュ・コロンビア大学(UBC)にて開催されます。今大会は「日本語教育の新たな可能性:言語・コンテンツ・文化の統合」をテーマとし、日本語学、日本語教育、言語教育、日本研究など、さまざまな分野の研究者及びあらゆるレベルの教育機関でご活躍の先生方に、このテーマを多角的視野から討論していただけることを期待します。そして、参加者による理論・実践報告・課題の提示などを通し、新たなカリキュラム・評価法作り・教材開発などの示唆になることを願っています。

大会プログラムは、例年通り基調講演、研究発表、教師研修会、パネル・ディスカッションなどを予定しております。今大会には基調講演者としてプリンストン大学から牧野成一教授がいらして下さることになり大変光栄に思います。また、教師研修、ラウンドテーブル・ディスカッション、パネル・ディスカッションには、日本、アメリカ、カナダ各地から多くの先生方をお招きしており、有意義

な研修、活発なディスカッションとなると確信いたします。ディポール大学から近松暢子教授、UBCからPatricia Duff教授、ならびに久保田竜子教授、筑波大学から砂川有里子教授、ポートランド州立大学から渡辺素和子教授、さらに、UBCからは日本文学の研究者であるStefania Burk教授、Christina Laffin教授、Joshua Mostow教授、Sharalyn Orbaugh教授にもお出でいただけることが決定しました。

カナダにおける日本語教育の発祥地、先の冬季オリンピックの開催地、自然に恵まれた風光明媚な観光地であるバンクーバーでの今大会に是非ご参加ください。

プログラムの詳細、参加費用、参加申込方法、宿泊施設、会場への交通機関などの情報は、すべてCAJLEのウェブサイトでご覧になれます。

http://www.cajle.info/annual_conference

カナダ国内外のあらゆる機関で日本語教育に携わる皆様にお目にかかれることを実行委員一同心からお待ち申し上げます。

特集記事

CASLT はカナダの第二言語教育を支援する全国組織です。昨年来の交渉を経て、CAJLE は今年 9 月に CASLT との提携団体となる運びとなりました。以下は、CAJLE 側の窓口として提携の交渉にあたった西島副会長の報告です。

The Canadian Association of Second Language Teachers (CASLT)との提携

副会長 西島美智子

前号のニュースレターで、The Canadian Association of Second Language Teachers (CASLT)と CAJLE の連携についてお知らせいたしました。昨年 8 月、トロントでの CAJLE 年次大会にあわせて、CASLT 代表の方と会合をもち、お互いの団体を理解し、今後は協力して活動を促進していくことを話し合いました。そして、CASLT のニュースレター (Reflections) には、昨年秋、CAJLE 年次大会の報告記事を載せていただき、CAJLE のニュースレターには、CASLT の紹介記事を書いていただきました(39号、17ページ)。その後、両団体の間でさらに話し合いが進展し、この度、CAJLE が CASLT の提携団体となることが合意され、CASLT の理事会で正式に承認されました。

CASLT は、カナダにおける第二言語教育を向上・促進させることを目的として、専門分野の開発の機会を提供し、研究を助成し、また、第二言語教育に携わる人たちの間で情報やアイデアを共有する促進などを行っています。オタワに本部事務所をもち、会員にニュースレターを送ったり、ホームページで情報発信をするなど、活発な活動が行われています。また、さまざまな専門分野の開発のための集まりも、いろいろな地域で、パートナー団体と協力しながら企画・実施しています。中でも一番大きなものは、Languages Without Borders という全国会議で、前回は、昨年 5 月にエドモントンで開催されました。そして、次回は、来年 4 月にモントリオールで開催されることが決まっています。

CASLT のホームページ(www.caslt.org) にも紹介されているように、提携団体には、全国規模および州レベルでそれぞれ十数団体あり、さらに、カナダ国外にもいく

つかの提携団体をもっています。CAJLE がそれらの仲間入りをすることで、カナダにおける日本語教育の現状や活動の広報をし、第二言語教育の分野で「日本語」をアピールすることができるようになるのは、大変意義深いことだと思います。また、CASLT は、提携団体が主催する学会やワークショップなども後援しています。すでに、CAJLE の年次大会や部会活動にもエールを送っていただき、大いに勇気づけられています。

CASLT の正式な提携団体となるのは、今年 9 月にウィニペグで開催される総会の場で、CAJLE 会長が招待され、そこで調印が行われることが決まっています。そしてその折、CAJLE 会長から CAJLE の紹介と活動内容についてのプレゼンテーションが行われる予定です。

それに先駆け、CASLT は、8 月にバンクーバーで行われる CAJLE 年次大会を応援し、遠方からこの大会に参加する CASLT 個人会員のために、旅費援助の枠を設けてくださいました。さらに、CAJLE 会員がこの特典に応募しやすいようにと、9 月の正式調印を待たずに、affiliate individual member として会員登録ができるよう、配慮してくださいました。会員登録については、http://www.caslt.org/members/members-structure-individual_en.php をご覧ください。

CAJLE は昨年、国際交流基金より、JF にほんごネットワーク(通称さくらネットワーク)の中核メンバーの承認を受けました。カナダにおける日本語教育の向上・発展のために、今後も国際交流基金トロント日本文化センターとも協力しながら、CASLT との提携を深めていくことを祈ってやみません。

アルバータ州北部のオイルサンドで有名な町、フォートマクマレー。その町の高校で新しく日本語プログラムが開設されました。私たち日本語教育関係者にとってはうれしいニュースです。以下は、その当事者であるダン・ベイスリー先生からの報告です。

Teaching Japanese in the Heart of Oil Country

Dan Baseley

Westwood Community High School, Alberta

When I first relocated from Toronto to the epicentre of the Alberta Tar Sands, Fort McMurray, I had absolutely no idea that within a year's time I would also be teaching Japanese, along with Social Studies. In fact, the opportunity to do so more-or-less fell into my lap – largely thanks to some of my students, and a very open-minded and cooperative administration that I still feel privileged to work under. All pleasantries aside, the sequence of events that would lead to a Japanese program at Westwood Community High School began with a few words that were quite honestly uttered without a great deal of thought concerning how they would be received.

As most teachers are wont to do on the first day of classes, particularly for first-year teachers who also happen to be new arrivals in their place of employment, I began all of that day's classes by briefly introducing myself. In the process of doing this, I trotted out some "old standards" that, in my experience, have often piqued the interest of others in the past:

- a. The fact that I was born in Tanzania to a bi-racial couple that subsequently brought the whole family to Canada after stops in both the U.K. and the Caribbean (Barbados, if you're curious).
- b. The fact that after graduating from university, I soon left for New York, where I spent the next two years working for a non-profit organization.

And:

- c. The fact that after leaving New York, I spent the next five years of my life in Japan before returning

to Canada.

Almost as soon as I had finished speaking, I was inundated with a virtual flood of questions...and to my surprise most of them were directed at the latter of the above items! I was asked about everything from what Japanese schools are really like, how many Kanji are used in Japanese, how chopsticks should be held, to whether or not certain household pets were also considered so in Japan rather than food! This scene repeated itself in almost every class that day, and as you might well imagine, it led to some interesting verbal exchanges – to say the least! In any case, I enjoyed these conversations and viewed them as a chance to educate these students concerning what living in Japan is really like – and possibly shatter some misconceptions in the process (read, question about household pets!). Nevertheless, I soon forgot about these particular events and immersed myself in the task that, to my knowledge, I had been hired to perform: teach English and Social Studies to classes whose numbers seemed to grow by the second (This is something that seems to be part and parcel of the life of a Fort McMurray teacher.).

I was soon made aware, however, that some of my students did not forget about these conversations so quickly. One day, I was presented with a petition that had been signed by more than thirty students, from all four grade levels of the school. They were interested in learning the language and to this end, wanted me to start an after-school Japanese club and teach them. After what must have been a few brief seconds of

consideration (The possibility of refusing does not really enter one's mind when one is surrounded by a group of eager students who are all waiting for an affirmative response!), I agreed and so began the Westwood Japanese Club. This was quickly followed by a conversation with one of the school's Vice Principals, who informed me that since Japanese was in fact on the Alberta Ministry of Education's List of International Languages, turning the club into a fully accredited high school course was definitely a course of action that he would support for the following year. This came to pass at the start of the 2008/2009 academic year.

Thus, dear readers, I cannot honestly take credit for conceiving the Japanese Program here at Westwood Community High School. On the other hand, I suppose that the efforts to "get it off the ground" and implement it have largely been mine – although I have had more than a little help with this as well. I initially set up my classes based on the following:

- a. Japanese Curriculum-related materials from the Alberta Min. of Ed. Website
- b. My own experiences concerning my first few years of learning Japanese (materials I used in my own Japanese lessons, including Kana charts, etc.)

It has occurred to me on many occasions that Oubeijin who are teaching Japanese in Canada and elsewhere have somewhat of an advantage, in the sense that our presence seems to serve as proof to our students that foreigners can learn the language if the requisite effort is made. I have also found that sharing my own stories of adapting to Japanese culture, as well as some of the humorous initial linguistic mistakes I made; have been very effective in terms of maintaining student interest in the program. I suppose that sharing such stories remind students that everyone, including me, makes mistakes and one should not use this as a reason to give up before really beginning. In fact, aside from the language, much of what I teach in my classroom revolves around

highlighting both the differences and similarities between Japanese and Canadian culture, based on my experiences of both. More personally, I should also mention here that I do not look like your average "Japan Nerd." I am quite obviously of Afro-Caribbean as well as Caucasian ancestry, have long dreadlocks and am fairly heavily tattooed. The only reason I am drawing readers' attention to such things at this juncture is that my appearance may be at least partly responsible for attracting certain students to Westwood's Japanese program who may not otherwise have been interested in participating.

In the program's first year, there were most certainly "growing pains." More specifically, I must admit that in my first year of teaching Japanese, my expectations were far too high concerning the learning abilities of my students and I consequently made the courses overly difficult for them. I was able to turn things around in the latter half of that year, as well as this school year, largely thanks to the aforementioned Vice Principal, who gave me a few helpful suggestions as far as "toning things down" a little. I also strongly feel that I have benefitted from being a part of the local Alberta J.T.A and Nihongo B.C., which has also proven to be an invaluable resource. I have found that the secret, as far as keeping the program going is concerned, is to keep things fairly challenging but also fun. While maintaining that balance is difficult at times, I believe that over time I have become much more skilled at doing this.

We have had a few small successes here at Westwood since the program began. A former student of mine is now in Japan participating in an exchange program there. She applied to the program after I invited one of its directors to visit our class and it is my hope that others will follow in her footsteps. Another teacher (from another school) and I are also in the process of planning a class trip to Japan, which will take place in the spring of

2011 if everything goes as planned. What I take the most pride in, however, are the repeated questions I have had from a number of students about whether or not a Grade Eleven Japanese course will be offered in the future (At the present, we only have Japanese 9 and 10.). Based on the present state of affairs, I am fairly sure that this will also come to pass.

I feel extremely privileged to have been asked to write

an article about my Japanese teaching experiences and I apologize that time constraints have prevented me from typing it in that language. I am also humbled by the presence of other teachers of Japanese in this country who have far more experience than I, and I remain grateful to them for all the help they have provided and continue to provide me. 宜しく願い致します。

今年3月、ケベック大学モントリオール校は初めてケベック州日本語弁論大会を主催し、新しい趣向を試みて大会を成功させました。以下は、同校の平井みさ先生による大会の様子のご報告です。

UQAM主催第21回ケベック州日本語弁論大会 — ケベック州大会を初主催して

平井みさ

ケベック州ケベック大学モントリオール校

2010年3月7日に第21回ケベック州日本語弁論大会が、今回初めてケベック大学モントリオール校(UQAM)で開催されました。UQAM大学は他のマギル大学やモントリオール大学に比べて、新しい大学ですので、その特徴を出したものを企画しようと思い、マルチメディアを駆使した大会にしました。スピーチをする学生の名前と題をパワーポイントに書き込んで、おおきなスクリーンに映し出しました。これは、参加者にも聞きに来られた方たちにも分かりやすく、好評でした。今回、例年になく参加者が非常に多く、初級が22名、中級が21名、上級が11名、自由カテゴリーが1名と全員で55名でした。9時から始まり、午後4時に終わるようにプログラムを作りましたが、時間通りに終わるかどうか心配しておりましたが、滞りなく進み、時間通りに終わることができました。学生たちが長時間待たなくてもすむように、午前中は初級の学生に来てもらい、お昼には中級、そして1時半に上級の学生に来てもらうようにして、受付の時間を3回に分けました。

また、審査員が話し合っている間、学生たちのミニコンサートを企画しました。私の学生で日本のアニメが大好きで、歌が上手なヴァレリー・ハーヴェイさんが「エヴァ

ンゲリオン」や「ファイナルファンタジー」のテーマソングを歌い、スクリーンに歌詞を書きこみ、みんながいっしょにカラオケのように歌えるようにしました。また、彼女が自分で日本語の作詞をして、ご主人のフィリップ・アルスノーさんが作曲した「もしも」や「わたしはひとり」を歌いました。そして、もうひとりの私の学生でバイオリニストのニカ・カンタビーレ(本名:ヴェロニック・ベジャン)さんも加わって、彼女が編曲した「さくらさくら」や「赤とんぼ」なども演奏しました。

また、受付を担当した学生はゆかたを着て、グラフィックを専攻している学生にマンガ風のポスターを書いてもらい、お祭りのような楽しい雰囲気を出しました。そのおかげで、学生たちもリラックスできて、弁論大会に参加することが楽しいことだと感じられたように思います。

そして、日本文化を促進するために、賞金や賞品以外に、茶道、柔道、剣道、なぎなた、生け花などの授業に一回参加できる券も受賞者たちに提供しました。

このように学生が楽しく参加できる弁論大会にしようと、いくつかの新しい試みをしてみました。今後、日本語学習を促進するために、より多くの学生が参加したくなるような大会にすることは私たちの課題だと思われま

部会・教師会情報

この欄では CAJLE の地域支部会のみでなく、カナダ各地の日本語教師会、CAJLE と何らかの形で関係のある日本語教育関係の団体などの活動を紹介して、日本語教師間のネットワーク形成を促進する一助としたいと考えています。

CAJLE アトランティック部会活動報告

大江都

2010 年度は、昨年に引き続き特に部会活動は行われなかったが、3 月に、年中行事である「アトランティック・カナダ日本語弁論大会」が、ニュー・ブランズウィック州のマウント・アリソン大学で開催された。セント・メアリー大学、ニュー・ブランズウィック大学、およびマウント・アリソン大学から、計 23 名の学生が参加し、スピーチを競っ

た。また、各大学の日本語教師三名も集まり、審査員の方々も交え、楽しい交流の場となった、来年の「第 13 回アトランティック・カナダ日本語弁論大会」は、ノバ・スコシア州にあるセント・メアリーズ大学において開催される予定である。

CAJLE オンタリオ部会活動報告

杉本陽子

2009 年 12 月 18 日(6 時～8 時)、日系文化会館(JCCC)キサキ・ホールにてオンタリオ部会と国際交流基金(JF)・トロントとの共催で「日本語学習を継続させる -高校から大学・カレッジへ」第1回の情報交換の集まりを催しました。今回は各機関(プログラム)の紹介と高校～Post Secondary の日本語教育の現状を概観について意見交換を行いました。暮れも押し迫っての開催でしたが予想を上回る 30 人の出席者を迎え、活気あふれる会となりました。

なお、オンタリオ部会は国際交流基金(JF)・トロントとの共催で「日本語学習を継続させる -高校から大学・カレッジへ」第2回の情報交換の集まりを催しますのでご案内いたします。

第2回の今回は、いくつかの高校と Post Secondary の機関の先生方に、実際にシラバスと教材をお持ちいた

だき、プログラム全体の紹介と具体的に教室で「何」をしているか、お話しいただきます。お互いを理解し、抱えている問題をともに考えていくには、まずお互いのことをよく知ることがその一歩となります。あまり会う機会のない現場の先生方にとって、有意義な情報交換のできる場となればと願っています。

日時: 2010 年 6 月 11 日(金)

午後 6 時から 8 時 30 分(5 時 30 分開場)

会場: 国際交流基金トロント

131 Bloor Street West, The Colonnade,
2nd Floor

参加費: 無料(ただし、下記担当者までメールでお申し込みください)

申込期限: 資料の準備の関係上、できるかぎり

6月8日(火)までに申し込みをお願いいたします。

お申し込みの際には、お名前、ご連絡先(住所、電話番号、メールアドレス)を、日本語教師の方は所属機関、教授対象学年を併せてご連絡願います。ご質問等も担当者までご連絡願います。

担当者: 齋藤典子(Noriko Saito)

The Japan Foundation, Toronto

Tel: 416-966-1600 ext. 224

E-mail: nsaito@jftor.org

Web site: <http://www.jftor.org/>

http://cajle.info/other_cajle_events

Alberta Japanese Teachers' Association (AJTA) Activity Report December 2009 – June 2010

Corbin Musselman, AJTA President

Spruce Grove Composite High School, Alberta

In October 2009, AJTA members decided to relocate the AJTA resource library from Harry Ainlay High School in Edmonton to IISLE (Institute for Innovation in Second Language Education). With the resources now at IISLE, they can be properly catalogued and loaned out to AJTA members throughout the province should they require them.

In December 2009 the resource library was moved and AJTA Executive members discussed creating a loaning agreement for the resource library. The decision was made to follow the Spanish Language resources lending agreement. This agreement will be shown to other AJTA members for a final approval in our upcoming June 2010 meeting.

At the time the resource library was relocated, a special grant application was sent to the Japan Foundation so that our library can be updated with newer materials. Since this application was sent in, the Japan Foundation has changed its application procedure for special grants. Currently, AJTA members are working on resubmitting our application using the newer

application procedures. We expect to have this application submitted before May 14th, 2010.

In April 2010, Japanese Language Consortium members met at IISLE (the current Chair for the 2009-2010 Japanese Language Consortium). At this meeting, stakeholders discussed the redrafting of the Consortium's Memorandum of Agreement that was completed in the October 2009 meeting. Letters explaining the mission and purpose of the Japanese Language Consortium are to be sent off to all potential stakeholders to see which organizations are interested in being part of the Consortium. Consortium members also discussed setting up teacher observation opportunities for teachers so that they can visit other Japanese language classrooms. By doing this, we hope to create a better exchange of teaching ideas amongst Japanese language educators.

In June 2010, AJTA members will meet to take a look at the new Guide to Implementation for Japanese Language and Culture 10-3Y, 20-3Y & 30-3Y. The GI has various teaching ideas that correlate with the Alberta

Education Program of Studies for Japanese Language
Education so it will surely be a valuable tool for Japanese

Language educators in Alberta.

Nihongo BC: British Columbia Teachers of Japanese (BC 州日本語教師会)

レノビッチ小本祥子

ブリティッシュコロンビア州バーナビーマウンテン高校

Nihongo BC はブリティッシュコロンビア州で日本語を外国語として教えている先生がたの団体で、高校の教師が主なメンバーです。12月には忘年会で親睦を深め、また学年末の6月ごろに集まってクラス活動などについて話し合う予定です。地域が広い為、集まれる先生はバンクーバー近郊に限られますが、メールのグループやウェブサイトなどで、盛んに情報交換やアクティビティ・シェアなどが行われています。詳細は Nihongo BC のウェブサイトをご覧ください。

<http://sites.google.com/site/nihongobc/>

3月にはリッチモンド市で教えていらっしゃるホー・グレイス先生が第21回全カナダ日本語弁論大会のパネル・ディスカッションに参加されました。ホー先生はご自身も日本語学習者として高校生、大学生のときに弁論大会に参加され、今は Cambie Secondary School で日本語を教えていらっしゃいます。このように多くの人との接触があり、コミュニケーションもてるよう Nihongo BC もこれからも頑張りたいと思います。

学会・研修会情報

汎米日本語教師合同研修会参加報告

大久保成子

オンタリオ州トント日加学園

一昨年の2008年7月、私はブラジル・サンパウロで開催された「第23回汎米日本語教師合同研修会」に参加する機会を得ました。

折しもその年は、日本人を乗せた最初の移民船「笠戸丸」がブラジル・サンパウロ港に到着して丁度100年にあたり、6月には皇太子殿下をお迎えして、サンパウロ市でブラジル日本移民100周年記念式典が盛大に行われました。

ブラジル日系人口は全国で150万人、サンパウロ州だけで110万人が住んでいます。その大半がサンパウロ都市圏に集中して、世界最大の日系人移住地域となっています。

今回私が参加したこの研修会は、国際協力機構(JICA)

が推進している日系社会支援事業の一環で、毎年夏サンパウロで、ブラジル日本語センター主催のもとで行われています。初めて私がこの都市に足を踏み入れた7月15日には、記念式典の余韻がまだ街のあちらこちらに残り、その時の様子がじかに感じられました。研修生は国内各地からの18名とカナダ、ドミニカ、ペルー、ボリビア、パラグアイ、アルゼンチンからの10名を含め、総勢28名が参加されました。

現地の日系新聞に開会式の模様と写真が掲載されましたが、紙面の関係上ここにご紹介できないのは残念です。

期間は7月15日から23日までの9日間で、例年よりかなり短くなったことから、過密スケジュールの毎日でした。

ホテルに着いた初日からいきなり宿題が与えられ、開会式終了直後から最終日までに18教科を履修いたしました。8時20分の朝の体操から一日が始まり、夕方6時頃までの研修で、昼休み1時間と毎時限15分の休憩も準備などで慌しく過ぎました。

研修内容は、教師としての心構えを学ぶ「日本語教師としての役割」や「授業の実際」などの教科、「文法・文型」「音声学」「教科書分析」など基礎的な知識を学ぶ教科、そして「教え方のテクニック」「ひらがな、カタカナ、漢字の導入」「複式授業」などの技術教科とに分けられ、あらゆる角度からどのようにすれば外国語としての日本語を効率的に教えることができるのか、その技能を学び指導力の向上を図ったものでした。

授業では、教室活動を通して導入の方法、基本練習、応用練習などの実例を紹介し、実際に練習しながら体得していく内容で、研修生各自で副教材や授業の流れに沿った教案を作成する実践練習もありました。プログラムの最後には、5~6人が1グループになって授業案を作り模擬授業を行いました。

さて、この研修で印象に残ることが幾つかありました。地元の大学や日本語学校で講義をもつ講師の方たちの教える姿勢は、一方的に話したり質問に答えたりするのではなく、同じ教師という共通の立場で問題を提起し、共に考察しようとする真摯な姿勢に好感がもてました。更に、間違いやすい発音の直し方や練習方法など音声学を取り入れた講義や、学習者のニーズに100%応える教科書を見つけるにどのように分析して選択すればよいのか、その方法を一緒に考える講義は新鮮で意表をつくものでした。

また、研修にはグループ作業が多かったことから、学習を通してお互いを理解しようとする親しい交流の場がふえました。それは、結果的に日本語の世界を広めることだけでなく、自分の身の回りの世界をも広げることになって、より自分の世界が分かりやすくなるように思いました。

このように、日本語教師として貴重な経験になったこの会に参加できたことに改めて幸運であったと思うと同時に、開催に全面的にご支援やご協力を戴いたJICAを始め、関係者の方々に心からお礼を申し上げ、汎米日本語教師合同研修会参加報告といたします。

母語継承語バイリンガル教育(MHB)研究会と継承語科研共催

「第2回継承語教師養成ワークショップ」

福川美沙

オンタリオ州トロント補習授業校

2010年3月26日、27日の母語継承語バイリンガル教育(MHB)研究会と継承語科研共催による、「第2回継承語教師養成ワークショップ」は無事、盛況のうちに終わりました。100名を超える方、特に多くの海外会員の参加を得て、非常に充実した会となりました。

2003年8月の発足以来、7年目を迎えたMHBは、1)研究活動の活性化、2)実践活動の質の向上、3)情報の交換・発信および文献収集を目的とした研究会です。「対象領域」はバイリンガル教育を必要とする年少者の言語教育とし、以下を含みます。

1. 先住、定住、新来児童生徒の母語・継承語教育
2. 日本人・日系児童生徒の継承語としての日本語教育
3. 聾児のためのバイリンガル教育
4. 海外・帰国子女、国際学校子女、その他各種イメージ教育

また、このMHBとは、CAJLE初代会長である、中島和子先生(トロント大学名誉教授)が会長をつとめていらっしゃるものです。

バイリンガル評価ツール

ワークショップ1日目は、中島和子先生の「継承語、継承語教師、継承語力とは？」にて始まり、母語と継承語はどう違うか、JHL 教師と JFL 教師はどう違うか、また具体的に、継承語に関して親や教師が迷う点を挙げ、継承語の特徴を明確に提示されました。例えば、その迷う点とは「家で継承語を使うと子供が混乱するか」「家で継承語を強要すると現地語の力が下がるのか」「家と学校の言語スイッチをすると知的発達にマイナスか」などの疑問点でした。

継承語の評価ツールは4つの分野に分かれます。まず生田裕子先生(中部大学)が「バイリンガル作文力」「バイリンガル語彙力」に関する、評価ツールを紹介しました。そして櫻井千穂先生(大阪大学大学院博士後期課程)は「バイリンガル読書力」に関して、カルダー淑子先生(プリンストン日本語学校)は「言語背景調査」を使用した評価ツールを紹介しました。今後、主にこの4つの評価ツールを用いて、世界各地にいる調査協力者が力を合わせて継承語の力の評価をしていく予定です。

継承語の教え方

カリフォルニア州立大学ロングビーチ校の片岡裕子先生とダグラス昌子先生による「アメリカで継承語をどう教えるか—学習ゴールの立て方、スキヤフォルディングの仕方、読み書き指導ほか」について講義がありました。主な内容は次の3点です。

1. 子どもの発達段階、言語能力、認知レベルを踏まえた学習ゴールと到達目標の立て方
2. 内容重視の言語教育で必要とされる教師の知識と技能、母語話者用の生教材を使用するためのスキヤフォルディングの仕方、読み・書き指導
3. 言語形式の提示からインプットアクティビティ・アウトプットアクティビティへと段階を踏んで行う語彙・文法項目の練習方法

これらはアメリカにおける教師の研修プログラムの内容であり、事情の違う諸地域では全く同じ指導は難しいかもしれませんが、非常に参考になるものでした。

分科会

1日目の分科会で、私が継承日本語教育に関する文献のデータベース化に向けて「データベースにおける問題点と留意点」について話しました。なぜなら私は「継承語教育文献データベースの構築」(科学研究費補助金)の代表者である中島和子先生の助手をトロントで勤めているからです。その後4つのグループ(作文力、読書力、言語背景調査、会話力)に分かれ、それぞれの評価ツールを用い、どのように調査を進めていくか話し合いました。作文力チームでは、日本も含め、世界各地で子供たちの継承語教育に関わる教師の熱意が伝わってくるような熱いものでした。ワークショップの後も各分科会からメーリングリストが立ち上がり、情報交換を行っている最中です。

2日目の分科会は前日とは異なり、プログラム形態別4つのグループ(海外補習校、日本語学校、国内外国人児童生徒、インターナショナルスクール・イマージョンスクール)に分かれました。継承語を別の角度から捉え、大変実りある会でした。世界各地での継承語に対する問題、状況が違う事を知り、しかしその反面同じような問題や悩みをシェアすることもでき、初めて継承語に関わる教師がつながったような気がしました。

今後さらにこのワークショップで培ったネットワークを強めていき、継承語に関する調査を進めて行くと共に、情報の交換・発信およびリソースの収集にも一層力を入れていくそうです。

なお MHB にご興味がおありの方は、上記のメーリングリストに参加することも可能です。現在、補習校、作文力、インターナショナルスクールの3つのメーリングリストが立ち上がっておりますので、参加希望の方は、福川(blue_setagaya@hotmail.com)までご連絡ください。

今回は8月2、3日に会話力(OBC)、4日に研究大会、5日に補習校ワークショップを予定しています。また MHB へのご入会(会費無し)は、同会のウェブサイトをご覧ください。<http://www.mhb.jp/cat1/>

学校紹介

ブロック大学

岩田園美

オンタリオ州ブロック大学

ナイアガラ半島の断崖の上に立つブロック大学の公園のように設計されたキャンパスからは、セント・キャサリンズ市の街が一望できる。セント・キャサリンズ市の住民はイギリスやスコットランドをルーツとする白人のカナダ人が圧倒的に多く、私が教え始めた2000年の頃はこのような白人の学生が大部分を占めていた。しかし、この頃は中国系、アフリカ系、インド系などさまざまな文化背景を持つ学生が増え、日本語のクラスも国際色豊かになってきた。

日本語学習者の数は1クラス30名くらいから毎年増加し続け、最高で75名に達した。しかしながら、2007年に30億円をかけた校舎や寮などの拡張工事が行われ、予算削減を余儀なくされた。その結果、日本語コースが所属するModern Language Departmentは、マイナーの言語コース(日本語、ロシア語、中国語、アラビア語)を隔年ごとに開講することになった。例えば、07年にはロシア語とアラビア語が開講され、その間、日本語と中国語は閉講といった具合だ。

しかし、その後、予算の削減がストップしたせいかどうか分からないが、人気のある言語コースは2年連続で開講されるようになり、日本語のコースも昨年に引き続き、今年の秋にもそのまま開講される予定だ。特に学生が抗議行動や署名運動をしたという話は聞いていないので、日本語コースへのニーズが高まっただけではないかと思う。去年もコースが始まる前から日本語コースの受講を希望する学生

からたくさんの連絡をもらい、コースの登録を締め切った後もどうにかコースに登録する方法はないかとの多くの問い合わせがあった。

ただ、ブロック大学はこれまで第二外国語が必修とされてきたけれども、近い将来第二外国語が必修からはずされることになりそうで、そうなった場合、日本語のコースを受ける学生も激減する可能性がある。

学習者にとって日本語は、文法を習う前にアルファベットとは全く違うひらがな、カタカナ、漢字といった字体を覚えなくてはならないので、第一言語が英語やヨーロッパ系言語の学習者には、難しいとされている。

これまでに使用したテキストは、『Yookoso』、『Nakama』、『Nakama1A』だが、毎年教える速度が早すぎる、覚えることが多すぎるというクレームが来る。なので、今年は『Nakama1A』を1年かけてゆっくりと教えてみた。これから日本語のコースが生き残るためには、教える速度を落としたり、日本語をローマ字で教えなくてはならないかもしれない。

ブロック大学 Brock University

学生数: 17,000名

学校所在地: 500 Glenridge Ave., St. Catharines, Ont., L2S 3A1 Canada

ウェブサイト: <http://www.brocku.ca/>

オタワ日本語学校

小林佳文子

オンタリオ州オタワ日本語学校

オタワ日本語学校は、日系人の父兄の「子供達に日本語を忘れさせたくない」という思いをかなえるために1976年に設立され、当初は国語を勉強するための学校でした。その後、国際結婚をした親を持つ子供が増え、日本語の母語話者ではない父兄からの「自分達も日本語を

勉強したい」という要望がでてきたことから、日本語を第二(/三/四)言語として教えるクラスができるようになりました。現在、4歳児から成人まで、15クラス220人が在席しています。

4-5歳児は歌や絵本、文化紹介などから日本語に親

しみ、小学1年から6年生は、光村図書の国語教科書を使用して勉強しています。

ユースグループのクラスは日本の漫画やアニメ、ゲーム、文化に興味のある13歳から18歳のカナダ人からなり、初級は「げんき 1」、中級は「げんき 2」を教科書として使用しています。

成人クラスは、初級1と初級2は「Japanese for Busy People 1」、中級1は「Japanese for Busy People 2」、中級2は「Japanese for Busy People 3」を基本テキストとして使っています。読む、書く、聞く、話す、の4技能をバランスよく学ぶとともに文化紹介も取り入れ、さらに全レベルを対象としての書道大会や俳句大会なども催しています。

当校のユニークなところは、上級1と上級2の構成です。初級から中級2までは年ごとに次のレベルが上がっていきませんが、一番上の上級2のクラスは、日本に何年か住み、仕事をしたりした経験のある学習者で構成され、カナダに戻っても日本語を忘れたくないために当校に通っています。日本語能力試験では1、2級のレベルを要し、日本のニュース等を聞かせて討論をしたりすることもできます。これに対し、上級1のクラスは、初級1からはじめて5年、6年と通っていますが、日本に行ったことがないため、上級2の学習者とは会話力や聞き取りにかなりの差があります。このクラスの学習者は上級2には上がらず、このレベルにとどまって3年、4年と勉強を続けています。既存の上級の教科書はほとんど学習済みなので、読解

は日本の面白そうな情報やショートストーリーを読ませて意見を交わしたりさせ、聞き取りでは日本の音楽やYoutubeなどから話題性のあるものを選んで教材として用い、聞き取った情報を書かせたりしています。

問題点は、授業の時間数が限られていることです。全レベルともに週に1回だけの授業のため、なかなか学習したことが身につけません。家でも勉強している生徒はよくできるのですが、学校だけに頼っている生徒もあり、日本語力の差はどんどん開いていきます。また、子供のクラスでは長い夏休みの間、日本に一時帰国した際に1ヶ月ほど日本の小学校に通わせるため、夏休みの間に帰省した子供とカナダで夏を過ごした子供の言語力の差はとて大きくなります。

小学校レベルのクラスでは、国語の教科書は日本国籍を持つ子弟は無料で受け取れることになっているのですが、日本では4月の新学年開始にあわせて教科書が配布されるのに対して、当校では9月に新学年が始まるため、教科書の調達が困難なことが問題となっています。

オタワは政治の街で日本企業などもほとんどないため、日本人の数も多くありません(学生も含めて3000人程度)。日本語学校で週に1回働くだけでは収入的に生活が難しいこともあり、辞めていく方が多いのが実情です。毎年の教師の確保とその研修に夏休みが瞬く間に終わり、また新学期が始まるという状況の中で、今年は35周年を迎えようとしています。

レジャイナ日本語学校

大谷まどか

サスカチュワン州レジャイナ日本語学校

レジャイナ日本語学校は設立から15年程になります。設立当初からしばらくは、中、高、大学生から一般までを対象とした初級と中級のクラスや、日系人の子弟を対象とした継承語のクラスの授業をおこなっていました。ただ、一

時期は、ボランティアで教える先生の確保が出来なかったり、子どもの数が少なくなったりしたため、クラスは初級レベルの一つに留まっていたこともありました。ここ数年レジャイナでは日系の子どもの数が増えてきたため、継承語のクラ

スも再開されています。継承語のクラスは現在、4歳児のクラスに6人、5歳児のクラスに3人、小学生のクラスに4人の学習者がいます。

継承語のクラスでは、継承語を教えるための適当な教材がないため、4歳、5歳のクラスでは絵本や童謡を利用し、身体を動かしたり工作をしたりしています。5歳児のクラスからはひらがなを導入し、書くことも勉強しています。小学生のクラスは、小学一年生から三年生までが同じ内容で勉強して、特に、ひらがな、カタカナを中心に、語彙を広げることに努めています。また、家庭で使われるカジュアルな会話でなく、丁寧な日本語を使ったやりとりができるように、先生との会話には丁寧体を使うように指導しています。子供たちは漢字にも興味があり、筆順、払い、止めなどに注意して教えるためきれいな漢字が書けるようになります。

どのクラスも授業はほとんど日本語でおこなっていますが、場合によっては英語で説明することもあります。日本語がわかる保護者の協力も大切なので、家庭でも一緒に勉強できるよう宿題も提供します。

「日本語は楽しい」をモットーに、日本の行事を紹介したり折り紙を取り入れたりして、指導者一同、子どもたちともに

日本語の学習に励んでいます。授業の詳しい内容は、保護者にお知らせする目的で以下のブログに紹介していますので、関心のある方はご覧ください。

<http://plaza.rakuten.co.jp/kaedekko/>

日本語初級クラスは、群馬県藤岡市の中学生とのホームステイ交換留学プログラムに参加しているレジャイナの中学生、そして、神奈川県の手学院との高校生交換留学に参加しているレジャイナの高校生を主な対象としておこなっています。これらの生徒たちの中には、日本のアニメを観て日本に興味を持ち、アニメに使われる言葉を良く知っている生徒もいます。それはそれでいいのですが、相手に対して失礼な言い方にならないように丁寧体を使って話すことに注意し、日本語初級レベルで使われる自己紹介、家族紹介、一日の出来事などの話し方を学びます。あわせて文化紹介も授業に取り入れています。

レジャイナ日本語学校 Regina Japanese School

年限: 4歳～高校生

生徒数: 約30名

連絡先: 2215 Queen St, REGINA, SK

リレー随筆

以言伝心

下野 香織

アルバータ州アルバータ大学

去年の6月、私は幸か不幸か約一ヶ月間をフランス南西部のトゥールーズという町で過ごす機会があった。夫と同時に一年間のサバティカル(研究休暇)をとることができ、夫が共同研究のため訪仏するのに同行したのである。仕事柄、学会などの目的で英語圏外の国にも旅行したことはあるのだが、一ヶ月という長期間、それも日本語も英語も通じない環境で暮らしたのは今回が初

めてであった。フランス語はカナダに来てすぐに(もう18年も前の話になるが)初級クラスをとったことはあったのだが、その程度のフランス語では役に立たないことはすぐに明らかになった。買い物で値段を尋ねることはできても数字は聞き取れないし、デパートのセールで掘り出し物らしきものがあった(ちなみに私の趣味の一つはショッピングである)、サイズや値段をうまく聞けず、あき

らめることになった。極めつけは、デリのお店で夕食にラム肉のカレーを買ったのだが、思ったよりずっと高かったのだ(たしか二人分で40ユーロくらいしたと思う)何か言いたかったのだが何も言えず、すごすごと支払いをして店を出ることになったことだ。フランスに行っておいてフランス人が英語を話してくれるだろうと期待する方が間違っているのだが、言葉ができないことの不便さ、そして、言いたいことが言えないことによる劣等感のような感情を経験する一ヶ月であった。

些細なことではあったが、この経験を通し、私達の生活や社会で言葉の果たす役割やその影響力を実感し、同時に私達外国語教師が学生に対してしてあげられることはなにかということに改めて考えさせられた。言葉というのはやっかいなもので、うまくコミュニケーションがとれている時は気にも留められないが、言葉が理由でうまく行っていたのもうまく行かなくなったり、下手すると社会問題にまでなったりすることも少なくない。日本やカナダでも、失言を新聞などで取り沙汰された政治家は何人もいるし、今こうやっている間にも、英国首相がマイクを外し忘れて言った一言で大変な目にあっている。「口は災いのもと」とはよく言ったものだと思う。

では、無口でいるほうがいいのか、というところでもない。「以心伝心」という概念は、インターネットのWeblio辞書(<http://www.weblio.jp>)によると「言葉では表せない仏法の神髄を無言のうちに弟子に伝えること」という意味の禅語から派生して「考えていることが、言葉を使わないでも互いにわかること」という意味で使われるようになったそうだ。日本の文化では美德とされている概念であるが、カナダで通じるかという、なかなかそうはいかない。これは、カナダに限らず最近の日本でもそうなのかもしれないが、黙っていてもわかってもらえるということは、よほど近い間柄でない限り(あるいはそうであって)なく、黙っていると変な風に誤解されたり、相手のいいように話を進められてしまっていたりする結果を招きかね

ない。つまり、「以心伝心」よりは、言葉でしっかりと心を伝える「以言伝心」の方が尊重されるのである。

「人間は考える葦である」といったのはパスカルだが、人間は考えるだけでなく、考えたことを伝え、共有することで、社会を形成している。そして、そのための手段の一つが言葉であり、外国語教師である私達の役割は、学習者達が自分の考えを的確に、そして自信を持って伝えられるようになるよう手伝うことだと思う。最近はいわゆる正しい日本語よりも自然な会話力が大切だという意見も出てきているようであるが、カジュアルな場面で楽しく会話ができる力だけでなく、必要なときには正確な日本語ではっきりと自信を持って発言できる力を学生達に身につけさせてあげたいし、学生達にも、そういう力の大切さを実感してほしいというのが私の個人的な意見である。

と、ここでは、前回の安部先生から依頼を受け、日頃あまり言葉にして考えていなかったことを書かせていただいた。ところで、タイトルにした「以言伝心」という表現は、私が考えついた、と言いたいところだが、インターネットで調べると既に何人もの方に使われていたもので、「以心伝心」の反語として辞書に現れる日もそう遠くないかもしれない。

今回のリレー随筆はカルガリー大学の楊先生にお願いすることになっています。また先生の新しい発見について聞かせていただけたと思いますのでお楽しみに。

執筆者のプロフィール - 下野香織(かばたかおり)
京都府出身。1992年にカナダ・アルバータ州立大学言語学修士課程に入るため来加。そのまま博士課程に入り、2000年言語学博士号取得、一年間同大学東アジア学科常勤講師として働いたあと、2001年に同助教授に着任。2007年より、同准教授、及び、高円宮日本教育・研究センター所長を兼任、現在に至る。

CAJLE 掲示板

CAJLE 2010 年上半期活動報告

CAJLE 書記 ハウ博美

I. 理事会担当報告と承認事項

1月24日

大会実行委員会のウッド氏より2010年度年次大会日程、大会プログラムの内容、その他の確定事項が発表された。

大会実施期間

:2010年8月13日(金曜日)~2010年8月15日(日曜日)

大会実施地:

University of British Columbia (UBC), Asian Center, 1871 West Mall, Vancouver, BC. V6T 1Z2

大会テーマ:

「日本語教育の新たな可能性: 言語・コンテンツ・文化の統合」

2月24日(提案)~3月1日(理事会承認)

大会プログラムの内容と大会前後の理事会日程について、CAJLE 大会実行委員会のウッド氏より発表があり、理事会の承認を得た。詳細は CAJLE ホームページを参照。

http://cajle.info/annual_conference

1)大会日程

8月13日(金)~8月15日(日)

2)理事会日程

8月12日(木曜日)午後3時~5時(Asian Centre Room 604)

8月16日(月曜日)午前9時~11時(Asian Centre Room 604)

2月下旬

開発企画から2010年度のスポンサーシッププログラムの内容が発表され、ホームページにアップロードされた。

4月7日

昨年11月より理事会会長を一時休任(西島氏が代行)していた大江氏が復帰。

4月8日

2010年度大会における研究発表の応募締め切りの変更(4月8日から4月15日)に)が発表企画より発表された。

4月10日(提案)~4月13日(理事会承認)

昨年度より検討されていた CASLT と CAJLE のパートナーシップ提携について、2月に行われた CASLT の理事会で

理事会全員の承認が得られたとの報告が会長代理・西島氏より発表された。それに応じて、CAJLE 理事会でも同提案が承認された。なお、正式な調印は9月を予定。

4月13日(提案)~4月16日(理事会承認)

大会実行委員、補佐、会計から提案された2010年度大会参加費、支払方法、大会時の昼食費等についての内容が理事会により承認された。

今大会から、早期支払い割引を導入し、6月30日を早期支払い割引の締切日とする。また、申し込み締め切り日を7月31日とし、以降は当日受付とする。詳細は CAJLE ホームページで Registration をクリック。

<http://cajle.info/home>

5月4日

国際交流基金からの助成金に関して、申請額全額交付が決定したことが大会実行委員の竹井氏より報告された。

5月6日

発表企画の有森氏から大会研究発表に関する決定事項が報告された。本年度の応募は最終的に65本であった。元来の発表枠は24本だが、プロポーザルの質の高さ、応募本数の飛躍的な増加状況から、発表枠を36本に拡大し、3会場同時進行(通常は2会場)で行うことに決定した。

5月10日

開発企画では本年度更新されたスポンサーメニューをもとに、3月からBC州の日系企業団体にスポンサー依頼を働きかけてきたが、現在までのところ、2社より寄付があったことが西島氏より報告された。詳細は、CAJLE ホームページを参照。

http://cajle.info/sponsorship_program

II. 部会活動

部会・教師会活動のページ(8ページ)を参照。

III. ジャーナルCAJLE

2008年の年次大会よりジャーナル編集委員会が改編され、新たな編集方針のもと昨年夏に10号が発刊されたが、現在委員会では今年発行予定の11号の編集にあたり校正の最終段階に入っている。11号では4編の寄稿論文に加えて、合計8編の投稿論文のうち査読審査を経て2編の採用

となった。結果的にはこれまでにない厳しい採用率となったが、11号では不採用となった投稿も再考・修正に値するものが多く、再投稿を期待している。なお今回の査読審査ではジャーナル査読委員6名に加え、他11名による査読協力をいただいた。

来夏発行予定の12号の投稿締め切りは例年通り12月15日となる。投稿規程はホームページあるいは11号巻末を参照。

<http://cajle.info/publications>

IV. これからの活動案内

年次大会

詳細はCAJLEホームページを参照。

http://cajle.info/annual_conference

年次総会

年次大会第1日目、2010年8月13日(金)午後5時よりUBC, Asian Centerにて年次総会を予定している。今年は理事改選の年でもあるので、多くの皆様のご出席をお願いしたい。

国際交流基金コーナー

国際交流基金ウェブリソース紹介

齋藤典子

国際交流基金トロント

国際交流基金日本語国際センター、関西国際センターのホームページに、日本語教育に役立つ楽しいサイトができました。授業の準備や教室での活動に是非ご利用ください。また、学習者の皆様にもご紹介いただけましたら幸いです。

WEB版「エリンが挑戦！にほんごできます。」

日本語版：www.erin.ne.jp/jp/

英語版：<https://www.erin.ne.jp/en/>

日本語国際センターが制作し、NHKで放映された若い学習者向けの映像教材『エリンが挑戦！にほんごできます。』のWEB版。228本の動画や、2,000問を超える練習問題など学習ツールが満載です。このサイトを見ながら、スキットの主人公のエリンと一緒に、よく使われる日本語の表現を勉強したり、いろいろな日本文化に触れたりすることができます。

NIHONGO eな(いいな)

<http://nihongo-e-na.com/>

日本語学習ポータルサイト「NIHONGO eな(いいな)」は、日本語を勉強する人に役立つサイトやツール、

アイディアを紹介します。「読む」「書く」「聞く」「話す」「文法」「語彙」「かな」「漢字」「ツール」「辞書・翻訳」「社会・文化」「その他」の 카테고리ごとにサイト検索が可能で、それぞれのカテゴリー内にも、「初級」「中級」「上級」とレベル別に整理されています。

「アニメ・マンガの日本語」Web サイト

www.anime-manga.jp

「アニメ・マンガの日本語」サイトは、アニメ・マンガ好きの世界中の日本語学習者が、アニメ・マンガを入り口として、楽しく日本語を学ぶことで、日本語や日本文化への理解を深め、さらなる日本語学習の動機づけとすることを目的としています。

サイトの特徴として、海外で人気のあるアニメ・マンガ作品の実際のセリフなどに基づいて作成していますので、教科書や辞書にはない、アニメ・マンガに現れる生き生きとした日本語を学べます。アニメ風のキャラクターやマンガによる解説など、アニメ・マンガの世界観の中で学べます。さらに、興味やレベルによって学習内容や方法を自分で選んで、クイズやゲームで楽しく学べます。

☑ みんなの教材サイト

<http://minnanokyoza.jp/kyozai/home/ja/render.do>

☑ インターネット日本語試験 すしテスト:

<http://momo.jpf.go.jp/sushi/>

コピーライトフリーの日本語教材用素材や先生方のアイデアが共有できる「みんなの教材サイト」や、インターネ

ット上で無料で受けることができる「インターネット日本語試験 すしテスト」も引き続きご利用いただけましたら幸いです。

スカイプ茶話会へのお誘い

永富あゆみ
アルバータ州教育省

前任の国際交流基金派遣専門家、室屋氏の立ち上げたスカイプ茶話会を引継ぎ、現在月一回約一時間、様々な場所でご活躍中の日本語教育関係者の方々に話を伺っています。テクノロジー音痴ゆえ、不具合に対処しきれずご不便をおかけすることも少なくないのですが、今後も州、機関を超えネットワークを広げる場として活用していただければと思っています。最近では、デスクトップシェアツールを併用してのプレゼンテーションも試行できました。

これまでに特別ゲストとして、地域での日本語教育事情、課題、実践研究、プログラム立ち上げの経緯など、インフォーマルな情報交換にご協力くださった先生方は下記のとおりです(以下、苗字アルファベット順)。

- ダン・ベイスリー氏(アルバータ州 Fort McMurray , Westwood Community 高校日本語教師。日本語コース開講までの経緯)
- 江田 早苗氏[カンザス大学准教授。音声学、カンザス大学での日本語教育事情)
- 濱家 優子氏 (元オクラホマ州立大学日本語講師。継承語として日本語を学べる機関のない地域でのプログラム立ち上げ)
- マルチェッラ・マリ奥特ティ氏 (国際基督教大学アジア文化研究所 日本学術振興会外国人特別研究員。文法ハイパー辞書開発プロジェクト)
- 根津 誠氏 (国際交流基金、日本語国際センター専任講師。センターでの教師研修など)
- 大江 都氏 (カナダ日本語教育振興会会長、ニュ

ーブランズウィック州マウントアリソン大学講師)

- 大谷 まどか氏 (サスカチュワン州レジャイナ日本語学校校長。継承語としての日本語教育、教材)

また、この場をお借りし、スカイプの使用方法に慣れることができるよう忍耐強くあたたくご指南くださったレノビッチ祥子先生(ブリティッシュ・コロンビア州 Burnaby Mountain 高校)、山崎ウエンディ先生(同州 Seaquam 高校)に心よりお礼申し上げます。

日時などの詳細はヤフーのメーリングリスト Nihongo Canada ほかを通じてお知らせしていますので、ご興味を持たれましたらお気軽に ayumi.nagatomi@gov.ab.ca までお問い合わせください。これまでにブリティッシュ・コロンビア州、アルバータ州、サスカチュワン州、オンタリオ州から参加していただきましたが、カナダ全州制覇(日本語教育サミット?)を楽しみにしています!

永富あゆみ Ayumi Nagatomi

Skype ID: ayumi.nagatomi

Email: ayumi.nagatomi@gov.ab.ca

Japanese Advisor (sponsored by the Japan Foundation)

International Education Services, French and International Education Services Sector

Alberta Education

8th Floor, 44 Capital Boulevard, 10044-108 Street NW

Edmonton, Alberta

教材紹介

昨年の CAJLE 年次大会のパネルメンバーの一人で、このニュースレターにも教師会の報告 (Nihongo BC) をしていただいているレノビッチ小本祥子先生が、つい最近「ことば！ Fun with Words in Japanese」という教材集 (CD-Rom) を刊行されました。すばらしい教材ですので、先生ご自身に紹介文を書いていただきました。 — 編集部

ことば！ Fun with Words in Japanese

レノビッチ小本祥子

ブリティッシュコロンビア州バーナビーマウンテン高校

この CD-Rom 教材は初級日本語クラス向けの単語能力を引き伸ばすアクティビティ集です。学習者が言葉を積み木のように積み上げ、言葉を楽しみながら使って学習することを目的としています。65 種のアクティビティが CD-Rom にまとめられていますが、すべて実際に使っていたいただいたカナダの高校の先生方のアドバイスやコメントが生かされています。

アクティビティは使う言葉のトピックによって次のように分かれています。

1. 時間・数字
2. 自分・日常生活
3. 学校・自分のまわり
4. 買い物・食事
5. 旅行・その他
6. 色々な言葉が使える活動

それぞれのアクティビティには、具体的な使い方の説明、すぐコピーして使えるプリントとプロジェクト・サンプル、授業でのヒント、応用へのアイデアなどが入っています。

ファイルをウェブサイト形式でまとめているので、内容一覧表からアクティビティに簡単にリンクができ、「家族」などの言葉を入力してアクティビティを検索することも可能です。参考になるウェブサイトのリンクもあるので、アイデアを膨らませて色々な工夫することもできます。又、デジタル・ファイルなので、印刷せずに直接プロジェクターでスクリーンに投影してクラスに見せたり、教えている内容に沿うように加工したりするなど、いろいろな使い方ができるかと思います。この教材を使って学習者たちが、「日本語の言葉っておもしろいな、言葉を使っているいろいろなことができているな」と感じてくれると嬉しいです。

詳細や教材紹介の動画、アクティビティ・サンプルなどはウェブサイトをご覧ください。

<http://members.shaw.ca/funwithwordsinjapanese/>
入手方法はリッチモンドにある岩瀬書店にお問い合わせください。

ウェブ: <http://www.iwasebooks.com/>

メール: info@iwasebooks.com

巻末言

山田貢一郎のこと

室屋春光

ローマ日本文化会館 (ニュースレター編集担当)

3 年間の滞在期間が過ぎ在カナダ日本語教育アドバイザーの仕事を終えたのは今年の 6 月のことだった。そ

の後、国際交流基金の日本語教育専門家プログラムでローマ日本文化会館に派遣されローマに着いたのが 9

月の下旬で、それ以来、仕事の合間をぬっては週末にローマをあちこち歩いてまわっている。

そんなある土曜日の午後、思い立って新教徒墓地 (Cimitero Acattolico di Roma - Protestant Cemetery in Rome) と呼ばれるところへ行ってみた。ご存知のようにイタリアはカトリックの国である。この新教徒墓地に葬られるのは、いきおいもっぱら外国人ということになる。有名なところでは英国のロマン派詩人ジョン・キーツ (1795-1821)、同じく英国のロマン派詩人パーシー・ビッシュ・シェリー (1792-1822) がこの新教徒墓地に眠っている。また、手元にあるパンフレットには、ここに葬られるのは必ずしも新教徒だけではなく、ローマの地に客死した外国人はイスラム教徒でもユダヤ教徒でも仏教徒でもこの墓地に葬られた、とある。

ローマのコロシウム遺跡から少し南に行ったところに地下鉄B線のピラミデという駅がある。ピラミデというのはピラミッドのことだ。電車を降りて地上に上がり駅を出ると、正面に古代ローマの城門の一つであるサン・パオロ門が目に入り、その左手に高さ 25 メートルほどの小さなピラミッドがある。なぜそんなところにピラミッドがあるのかといふかる向きもあるだろう。なんでも紀元前 12 年ごろにローマ法務官で平民の行政官であったガイウス・ケステイウスという人が亡くなったときに、遺言に従って墓として建てられたということである。ローマには古代ローマ時代にエジプトから失敬してきたオベリスクが今でも 10 何本だけ建っているぐらいだから、その当時のローマの人々はエジプト趣味というのがかなり昂じていたのだろう。

新教徒墓地はピラミッドの裏手に位置している。このピラミッドを左に見ながらその裏側の墓地の塀に沿って少し行くと墓地への入り口がある。入り口脇の箱に気持ちばかりの参観料を放り込んで中へ入る。キーツらの墓は入ってすぐ左手の、墓地の中でも最も古い地区にある。そこから見物をはじめ小一時間かけて墓地を一巡し入り口へ戻ってきたところで、ふと「この墓地に日本人の墓はないのだろうか」と思った。

墓地の事務所兼案内所が入り口のそばにあったので、中に入ってたずねてみることにした。幸いなことに、中にいたのはボランティアで詰めている外国人で英語話者

だった。この墓地に日本人の墓があるかとたずねると、即座にひとつあるという答えが返ってきた。そしてコンピュータのデータベースで調べた上で、見つけやすいように墓地の地図の上に印をつけてくれた。

墓はすぐに見つかった。墓石の表には漢字で「大日本山田貢一郎之墓 明治十六年一月十五日於羅馬没」とあり、裏にはなぜかイタリア語ではなくフランス語で「KÔITIRO YAMADA, NATIF D'HIROSHIMA DE LA PROVINCE D'AKI, JAPON MORT A ROME A L'AGE DE 33 ANS, LE 15 JANVIER 1883 (日本国安芸県広島出身の山田貢一郎は、1883年1月15日に33歳でローマにて亡くなった。)」と刻まれている。したがって、山田貢一郎の生年は嘉永3年(1850年)、4隻の黒船が浦賀沖にあらわれる3年前のことということになる。

墓石からわかったのはそれだけである。フランス語で書かれた墓銘には出身地が含まれていて、日本語のそれよりも詳しいのが興味深い。

ローマを訪れた日本人としては、早くは 1582 年に九州のキリシタン大名の名代として派遣された天正遣欧少年使節というのがよく知られている。四人の少年たちが実際にローマの地に足を踏み入れて教皇グレゴリウス 13 世に謁見したのは 1585 年の春だから、今から 400 年以上前のことだ。

維新から間もないころの岩倉使節団というもの、維新前後のことを扱った書物などには必ず見かける。明治 4 年に西欧視察の目的で明治政府の高官が大挙して洋行したもので、近代国家として統一(1870年)されたばかりのイタリアもこの使節団の立ち寄り先の一つとなっていた。ローマはその当時は首都ではなかったが、百人からなる使節団のうちの何人かはローマの地を訪れたと見ていいだろう。

新教徒墓地にある山田貢一郎という人物の墓を見ながらそんなことを考えていて、この山田貢一郎について少し調べてみようかという気になった。調べてみるといっても、論文をものするわけではなく、イタリア語ができない私には、自分ひとりで当地の図書館を当たってみることもできない。いい加減なものだが、我が同胞山田貢一郎について調べるのに使う道具はインターネットのみで

ある。

手始めにグーグルで山田貢一郎という名前を検索すると、それほど多くはないが検索結果が出てくる。そのほとんどは図書館の蔵書目録や古書肆のウェブサイトである。それらのサイトからは、1883年にローマで客死した山田貢一郎は、亡くなる10年ほど前の1872年に村田文夫という人物との共訳で東京の玉山堂から『増補西洋家作雛形』(シー・ブリュース・アルレン著)という書物を出版していたことがわかる。山田はこのとき弱冠22歳。

『西洋家作雛形』の原題は『Cottage building, or, Hints for improving the dwellings of the laboring classes』というもので、米国のLibrary of Congressのウェブサイトを検索すると、著者名はAllen, C. Bruce (Charles Bruce)とあり、John Wealeという人物によって1849-1850年にロンドンで刊行されている。原題と刊行年からわかるように、この書物は英国ビクトリア朝期の労働者階級の住環境(小屋/住宅)を改善することを目的として書かれたものであるようだ。村田、山田の二人の共訳者がこの書物を翻訳したのは、同書が明治5年ごろの日本の住宅事情の改善に益するものがあると判断してのことと考えてよかろう。残念ながら手元には原著も訳書もないので、英国ビクトリア朝期の労働者階級の住環境と、維新から間もないころの日本の住環境とがどのように結びついていたのかはわからない。

『増補西洋家作雛形』が刊行された1872年といえば維新からまだ間もない明治5年のことであるが、この二人の訳者が維新以前から洋学に関係していたことは、『増補西洋家作雛形』を検索することで確認できる。広島大学工学部の丹羽和彦という方が1999年8月発行の「日本建築学会大会学術講演梗概集」に「村田文夫と『西洋家作ひながた』について」という論文を発表し、その中で、明治5年に刊行された同書は「軍事関係のものを除けば、わが国で最も早い西洋建築の刊本」であると述べている。

同論文では村田文夫の略歴についてもかなり詳しく触れられている。それによると、村田文夫は「天保7年(1836)4月5日に芸州藩医野村正碩の子として安芸国広島に生まれ、(中略)、英人、俄羅布児(ガラフル、トー

マス・グラバー)の斡旋により、国禁を犯して英国へ出奔するのが、慶応元年(1865)。帰国が明治元年であるから、正味の英国滞在はほぼ1年半強となる」とある。村田文夫は、幕末に西洋事情を知るために次々と密出国していった若い侍たちの一人だったわけだが、同論文では共訳者の山田貢一郎については、「明治2年6月に城内の洋学所が開校された際、英学教授村田文夫の下で助教授を務めたことが知られる程度であり、渡英の事実も確認できない」と述べており、山田の洋学経験は『西洋家作雛形』刊行のあたりまでは日本国内のそれに限られていたことを示唆している。

維新直後の山田貢一郎については、『藝藩輯要』人名索引」という安芸藩の公文書の類を集めた文書の名索引がPDF形式で公開されており、その中に山田貢一郎の名が以下のように見えるので、若干のことは確認できる。

山田貢一郎.....

士 平船附学校係③143E25, ① 34

同索引の凡例によると、「士」というのは『永世禄士族帖』のことなので、山田貢一郎の名前は、この『永世禄士族帖』に見えていることになる。『永世禄士族帖』とは、「旧藩臣は其の年[明治二年]十一月士族の称を附せられ改めて永世禄給附を受け是等は藩知事の隷下に属し新職制は布かれたが此時代に於ける記録の存するものに拠り当時の文武公職員や浅野家家政役人の氏名を収録」したもので、「明治三、四年頃ノ当主」が記載されている。

「平船附学校」というのがどういう種類の学校であるのかはよくわからない。ただ、同索引の中には「平船附学校係」の者がかなり多数(70名)あり、そしてそれらの名前のすべては『永世禄士族帖』に見える名前、つまり「明治三、四年頃ノ当主」の名前である。先に見た丹羽論文に、山田は「明治2年6月に城内の洋学所が開校された際、英学教授村田文夫の下で助教授を務めた」とあるので、「平船附学校」というのは、この洋学校の名称であるのかもしれない。だとすれば、維新直後に70名もの旧安芸藩士が洋学にいそしんだとも理解できるわけで、もしそうだとすれば、なかなかの壮観であつたらう。

その後、山田がいつどのようにして洋行し、ローマで客死するにいたったのか、その足取りをたどることはできなかった。

山田貢一郎についてインターネット上で調べてわかったことは、おおむね以上のようなことである。これしかわからなかったということもできるし、こんなにわかったということもできるだろう。もちろん、実際に広島に赴いていると古い文書を調べたり、あるいは、在イタリア日本大使館の記録などをあつたりすれば、もっと詳しいことがわかるに違いない。それでも、ローマの寓居にいながらにして、この地で明治 16 年に客死した山田貢一郎という人物のことに何がかのことは知ることができたのであり、あらためてインターネットの利便性を痛感した次第である。

北海道大学蔵書目録ウェブサイト

<http://opac.lib.hokudai.ac.jp/opac/basic-query?mode=2>

DOORS(同志社大学蔵書検索ウェブサイト)

<http://doors.doshisha.ac.jp/>

丹羽和彦「村田文夫と『西洋家作ひながた』について」(PDF文書)

http://ci.nii.ac.jp/els/110004153311.pdf?id=ART0006388703&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1274690353&cp=

米国 Library of Congress ウェブサイト

<http://www.loc.gov/index.html>

『藝藩輯要』人名索引 (PDF文書)

<http://ync10172-web.hp.infoseek.co.jp/geihan1.pdf>

編集後記

◆ 皆様は学生から Social Networking Service (SNS) への招待状をもらった時どのように対処されていますか。SNSとは卒業後離れ離れになっても、いや、在学中から友人同士つながりを持つことができるツールで、Facebook, Myspace, Zorpia, Plaxo などなど、たくさんあるようです。私はどれにも加入していなく、また加入でどのようなメリット・デメリットがあるのかあれこれ考えあぐねて、結局招待を受け取ったまま何もしないでいます。どなたか経験談がありましたらぜひお聞かせください。安袁岐@金具洲頓 ◆ ニュースレターの編集に携わってから何年になるのか、はっきりとわからないほど長い年月が過ぎました。高橋、西島、楊、そして室屋各編集長のもと、お送りいただいた原稿を誰よりも先に読めるという喜びを感じながらの編集作業でした。私もこの号をもって編集担当を外れることになりました。今後は一読者の目(ちょっと厳しい目)で配信を楽しみに待ちたいと思っています。ご寄稿くださいました皆さま、お読みくださった方がた、感想をお寄せくださった方、本当にありがとうございました。今後ともご協力お願いいたします。では

皆さま、バンクーバーでの年次大会でお目にかかりましょう。素妓素@都倫都 ◆ 私事で恐縮ですが、今号のニュースレター発行をもってCAJLEの理事(ニュースレター・ウェブサイト担当)から身を引くことにしました。ウェブサイトは各業務担当の理事の方が各自で必要な更新をできるようになることを考え、2年が過ぎてそのやり方も完全に定着しています。また、ニュースレターも37号から40号までと短い期間でしたが、安袁岐、素妓素の両氏とともに楽しく編集作業に携わることができました。原稿をお願いした皆さんには、いつも気持ちよく執筆を引き受けていただいたことに対し、この場をお借りして心からお礼を申し上げます。無露野@羅馬

投稿のお願い: CAJLE ニュースレター編集部ではCAJLE 会員の皆様からの投稿を歓迎します。小論、エッセイ、ご意見、耳寄り情報など、お気軽に編集部までお寄せください。 aokik@queensu.ca

会員規定

カナダ日本語教育振興会は、カナダにおける日本語教育の発展と向上を目指す非営利組織です。日本語教育に関心のある方ならどなたでも会員として登録することができます。

会員特典:

- ジャーナル CAJLE (年1回発行)及び、カナダでの日本語教育に関する情報が満載のニュースレター(年2回発行)、日本語教育関係の各種ご案内(メールでの送信)
- 年次大会、勉強会、その他の催しの参加費割引
- CAJLE 年次大会での研究発表資格

会費年度:

毎年6月から翌年5月まで。10月末までにお支払いをお願い致します。更新が確認できない場合、ニュースレターやメール配信を停止させていただきます。

年会費:

	カナダ在住者	非カナダ在住者
一般会員	\$ 45 CA	\$ 45 US
3年(一般)会員	\$ 120 CA	\$ 120 US
学生会員	\$ 30 CA	\$ 30 US
組織会員 (4名まで)	\$ 120 CA	\$ 120 US

会員申込書をご記入の上、メールまたは郵送でお送りください。申込書、お支払い方法についてはホームページをご覧ください。
<http://cajle.info/membership>

申込先:

Canadian Association for Japanese Language Education, P.O. Box 75133, 20 Bloor St. East, Toronto, Ontario, M4W 1A0, CANADA

Membership

We welcome everyone interested in Japanese language education.

CAJLE membership entitles you to:

- Receive the Journal CAJLE (one issue annually), the CAJLE Newsletter full of information about Japanese Language Education in Canada (two issues annually), and various announcements related to Japanese education via email.
- Attend the CAJLE annual conference, workshops and other related events at a reduced rate.
- Present research at the CAJLE annual conference

Term of Membership:

Memberships start every June and continue through May of the following year. Please kindly complete your payment by the end of October. If you do not renew before the end of October, you will miss the Newsletter and other announcements.

Membership Fee:

	Canadian residents	Non-Canadian residents
Regular Membership	\$ 45 CA	\$ 45 US
3 years Membership	\$ 120 CA	\$ 120 US
Student Membership	\$ 30 CA	\$ 30 US
Institutional Membership (up to 4 members)	\$ 120 CA	\$ 120 US

How to Join:

Please fill out the application form (available on <http://cajle.info/membership>) and mail or email it with the appropriate membership fee. Credit card payment is available online. Personal cheque and bank transfer are also accepted.

Mail to:

Canadian Association for Japanese Language Education, P.O. Box 75133, 20 Bloor St. East, Toronto, Ontario, M4W 1A0, CANADA